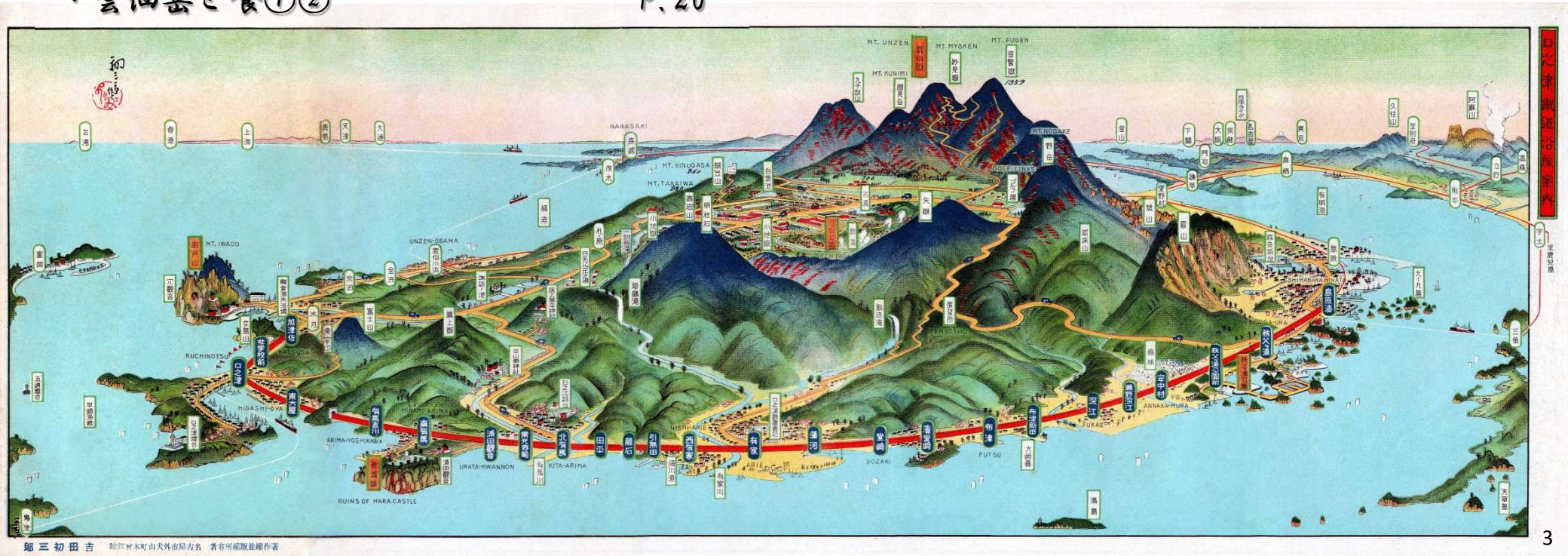
国立公園「雲仙」と島原半島世界ジオパーク
～雲仙岳の秘めたるパワー～

環境省九州地方環境事務所

仁田峠
平成新山
妙見岳
野岳
眉山
高岩山

目次

・国立公園とジオパーク　P、4
・雲仙岳の活動と島原半島　P、5
・雲仙岳の噴火と災害①②　P、6
・雲仙岳の恵み～生態系サービス～　P、8
・雲仙岳の水陸の景観美　P、9
・雲仙岳の四季彩　P、10
・雲仙岳360度①②③　P、11
・雲仙岳の山々の顔ぶれ①②　P、14
・雲仙岳と水①②　P、16
・雲仙岳と生物多様性①②　P、18
・雲仙岳と食①②　P、20
・雲仙岳と歴史・伝承①②③④　P、22
・雲仙岳と教育　P、26
・雲仙岳と文化財　P、27
・雲仙岳と阿蘇山①②　P、28
・雲仙岳と天草諸島　P、30
・雲仙岳を楽しむ　P、31
・参考：80年前の地元新聞記事①②　P、32
・参考：雲仙岳の80年前と現在　P、34
・参考：島原半島周遊の情報拠点　P、35
・掲載イラスト・写真の提供元①②　P、36



国立公園とジオパーク

●雲仙岳を共通シンボルとする２つの自然公園

雲仙天草国立公園の雲仙地域（国立公園「雲仙」）は、雲仙岳を中心として、島原半島３市の標高の高いエリア全体が指定されています。昭和９年の３月16日に日本初の国立公園に指定され、2014年で80周年を迎えています。指定の際に特に評価された点は、三方の海と雲仙岳が織り成す“水陸の大展望”です。

その国立公園を核として、平成20年には島原半島全体が日本ジオパークに認定されました。平成21年８月22日には日本初の世界ジオパークに認定され、2014年で５周年を迎えました。英名は Unzen Volcanic Area Geoparkで、テーマは「活火山と人の共生」です。

国立公園は「自然公園法」に基づいて指定され、区域内の雲仙岳本体の保護と利用について計画的に推進できる制度です。その説明からは一見、公園の区域外には関係のない制度のように思われがちですが、島原城下町、原城跡、小浜温泉街等の山麓の観光スポットにおいて、観光客の方々が楽しまれている山～里(町)～海の風景の山(雲仙岳)の部分は、実は国立公園の制度で美しい状態に保全されているのです。

そして、その山～里～海の風景に隠された大地のストーリーを楽しく伝える“ふるさと紹介”の制度がジオパークと言えるでしょう。

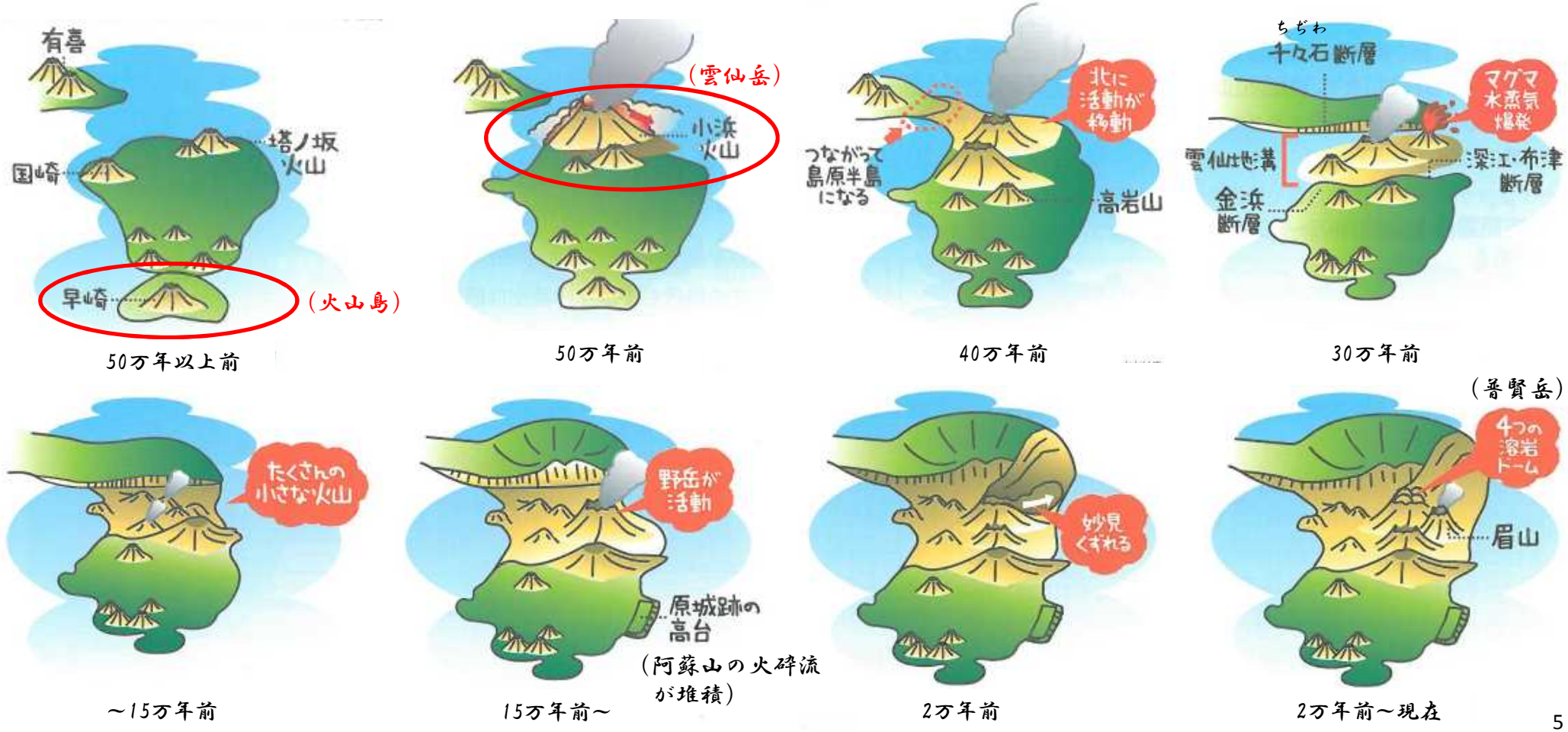
本誌では、国立公園とジオパークの共通シンボル「雲仙岳」の様々な側面に光を当てることにより、国立公園とジオパークの魅力を一体的に紹介してみたいと思います。

島原港のバックにそびえる
国立公園の東端の“眉山”

雲仙岳の活動と島原半島

●もともと火山島だった島原半島

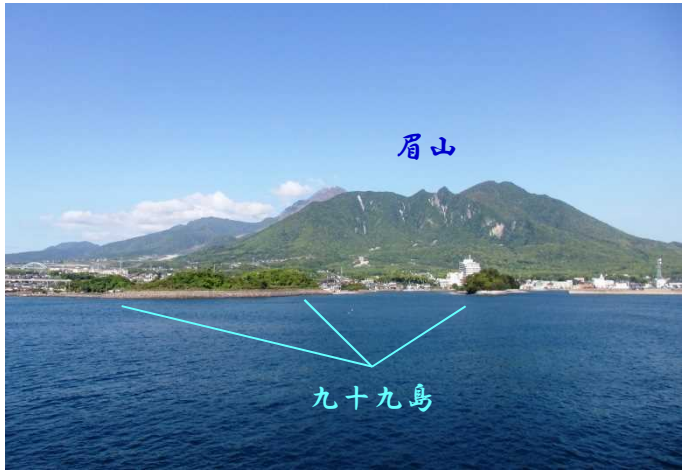
島原半島は、南端の口之津・早崎にあった小さな火山島の噴火から始まりました。やがて、噴火の中心が北方の雲仙岳（総称）に移り、約40万年前には九州本土とつながって“島原半島”になりました。その後、半島を南北３地域に分ける断層の形成を経て、現在に至るまで活発な噴火活動を繰り返し、立派な雲仙岳・島原半島が出来上がっています。



雲仙岳の噴火と災害①

●江戸時代の雲仙岳の噴火と災害

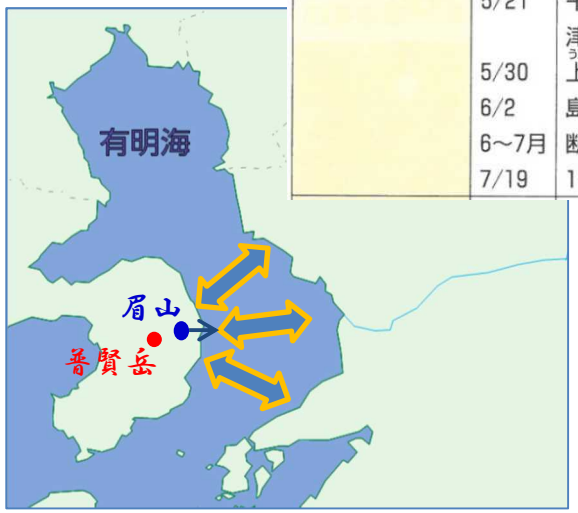
雲仙岳は、有史以降も活発に活動を続け、少なくとも３回は噴火したとされています。それに伴って、災害が発生しました（右表を参照）。特に、江戸時代の寛政の噴火では、普賢岳の噴火活動に伴う地震によって「眉山の大崩壊」が発生し、眉山の東側山体の土石が島原の町を埋めるとともに大津波を起こし、対岸の熊本と島原半島東側に繰り返し押し寄せて、甚大な被害を発生させました。この事件は、「島原大変、肥後迷惑」と呼ばれています。その一方で、噴火後には豊富な湧水が湧き出し、沿岸には良好な漁場や港湾、そして九十九（つくも）島の景観が生まれました。



寛政の噴火の際に大崩壊した眉山と崩落土砂で形成された九十九島

■雲仙岳の周辺で生じた噴火や主な地震活動

西暦（和暦）	時期	事　　象
寛文の噴火		
1663【寛文3年】	3月	普賢岳九十九島池より噴火
	12月	噴火が再開。普賢岳山頂から東北東へ約900m離れた飯洞岩峰より幅約100m、長さ約1kmの古焼溶岩が流出。
1664【寛文4年】		九十九島池が決壊し水無川に沿って土石流が発生。死者30余人
寛政の噴火		
1791【寛政3年】	11/3	雲仙岳西側山麓で地震頻発
1792【寛政4年】	2/11	普賢岳地獄跡火口より噴煙
	2/27	普賢岳穴迫谷琵琶の首より噴煙と土砂を噴出
	2/29	琵琶の首より新焼溶岩の流出始まる。
	3/21	穴迫谷蜂の窪からも溶岩噴出。琵琶の首からのものと合流し千本木に達する。
	4/21	三月朔の地震起こる。島原で震度5～6。新焼溶岩の流下ほぼ停止。
	4/23	震度4～5の地震2回発生。
	4/29	眉山東側山腹の楠平（楠木山）が幅300m以上にわたり約300mすべり落ちる。
	5/21	午後8時頃、震度6程度の地震（四月朔の地震）により眉山（天狗山）が大崩壊。津波が3回押し寄せ、第2波が最大で波高10m以上。死者約1万5000人
	5/30	上ノ原地区（眉山東山麓）の井戸より地下水が自噴。白土湖が誕生。
	6/2	島原城下の新山、万町一帯からも湧水。
	6～7月	断続的に噴火。地震活動は、その後消長を繰り返す。1798（寛政10）年11月
	7/19	13日の噴火後、終息に向かう。



眉山の崩壊に伴って有明海を往復した津波

雲仙岳の噴火と災害②

●明治時代以降の雲仙岳の噴火と災害

明治時代以降は、大正11年と昭和40年代に群発地震がありましたが、本格的な噴火は、記憶に新しい「普賢岳の平成噴火」です。溶岩ドームから流下する火砕流と、噴出物が雨で流される土石流によって、島原・深江地域に大きな被害が発生しました。この噴火の過程で溶岩ドームが普賢岳（1359m）の高さを越えて成長し、平成新山（1483m）と名付けられました。

国立公園の中心部で噴火が発生し、火砕流や土石流が国立公園内から市街地に向かって流下して災害を引き起こし、新しい最高峰が出現したという一連の出来事は、国立公園「雲仙」80年の歴史のなかで最大の事件であったと言えます。この災害からの復興の一環として、「活火山と人の共生」をテーマとした「島原半島世界ジオパーク」（平成21年認定）が誕生しました。

日中の火砕流の様子

夜間の火砕流の様子

■雲仙岳の周辺で生じた噴火や主な地震活動

西暦（和暦）	時期	事　　象
島原地震 1922【大正11年】	12/8	島原半島を震源とする群発地震が発生。死者26名、重軽傷者39名。
1968～1974【昭和43～49】年の群発地震 1968【昭和43年】		雲仙岳付近を震央とする有感地震が発生。地震活動は1970年に最も活発化。1974年普賢岳東ろくの小盆地でおきた火山ガスの異常噴出を以って活動は終息。
1990【平成2年】	11/17	普賢岳地獄跡、九十九島火口より噴火
1991【平成3年】	2/12	屏風岩火口より噴火
	5/20	溶岩ドーム出現を確認
	5/24	初めて火砕流の発生を確認
	6/3	火砕流が上木場（かみこば）地区まで到達。死者行方不明者43人
	6/8	火砕流が国道57号付近まで到達
	6/30	水無川で大規模土石流発生。有明海に到達
	9/15	火砕流が上木場地区、大野木場（おおのこば）地区まで到達。大野木場小学校消失。
1992【平成4年】	8/8	火砕流が大野木場地区まで到達
1993【平成5年】	6/23	火砕流が千本木（せんぼんぎ）地区まで到達。死者1人。7月には火砕流が国道57号線をこえる。
1995【平成7年】	5/上旬	噴火活動停止
1996【平成8年】	5/30	九州大学地震火山観測所、太田教授が「噴火は終息した」との見解を示す。

平成噴火前

平成噴火後

雲仙岳の恵み～生態系サービス～

●雲仙岳の生態系サービス

私たちの暮らしは、食料や水の供給、気候の調整など、自然の生態系の恵みによって支えられていますが、これらの恵みは生態学で「生態系サービス」と呼ばれます。島原半島では、古来、雲仙岳から様々な生態系サービスを受けてきました。火山災害を乗り越えながら、人々がこの地に住み続けて来た理由は、まさにこの点にあると言えるでしょう。

【供給サービス】
美味しい空気（酸素）、美味しい水、温泉、美味しい農産物・水産物、良質な木材など

【調整サービス】
山麓の温暖な気候、中腹以上の冷涼な気候、森林による気温変化の緩和や供水の抑制など

【文化的サービス】
美しい自然景観、宗教・伝説・文化（絵画、詩、小説等）・教育に関する素材の提供など

【基盤サービス】
上の３つのサービスの基盤となっている、生態系のもともとの作用
（火山噴火による大地の形成、植物による光合成、生物間の食物連鎖、水の蒸発による雲の形成・降雨、河川による水・土砂・養分の運搬など、物質を生産し、移動させ、循環させる作用）

雲仙岳の水陸の景観美

●水陸の大展望

国立公園「雲仙」の特色で、80年前の主な指定理由は“水陸の大展望”です。三方を海に囲まれた雲仙岳は、山と海がセットで眺められる景観が楽しめます。同じ火山の阿蘇山・くじゅう連山や霧島山とは異なる点です。

山から眺める海

海から眺める山

雲仙岳の四季彩

●四季の妙

雲仙岳の自然は季節を追って変化し、四季折々に異なる色彩の表情を見せてくれます。

仁田峠・妙見岳のミヤマキリシマ

春

夏

吹越周辺のヤマボウシ

普賢岳紅葉樹林（妙見岳）

秋

冬

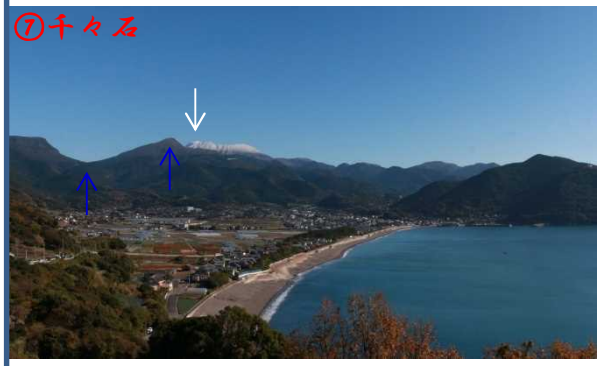
普賢岳の霧氷（花ぼうろ）

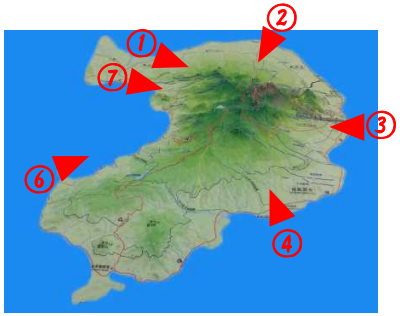
雲仙岳360度① ～山麓から～

●山麓から眺める表情

雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、山麓の各地域ならでは風景が地域の方々に親しまれています。

雲仙岳には、現在名前が知られているものだけでも30以上の山々があり、山麓各地域から見える山の組み合わせは異なります。写真中の白↓は平成新山の位置を表し、山並みの形の変化が見て取れると思います。
地域ごとに形・大きさが目立つ山があり、吾妻では吾妻岳、千々石では九千部岳（＋千々石断層）、有家では高岩山、島原では眉山が目立ちます（青↑で表示）。





雲仙岳360度② ～海を越えて～

●有明海・橘湾の海越しに眺める表情

雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、かつての漁師は山の形を見て自分の船の方角を把握していたと言われます。

①白木峰高原

②東よか干潟（佐賀県）

奈良時代に編纂された肥前国風土記には、かつて景行天皇が九州に行幸された際、対岸の長洲の浜（③のやや南）から雲仙岳方面を眺められ「あれは島か半島か」と気になって尋ねられる場面が登場します。有明海にぽっかり浮かぶ島のように見える島原半島の姿は、古代から人々の心を捉える景観だったのでしょう。
この景観は、平成24年、荒尾市（③）の市民公募で「荒尾八景」の一景に選ばれています。

⑦江の浦

③荒尾干潟（熊本県）

⑥天草松島（熊本県）

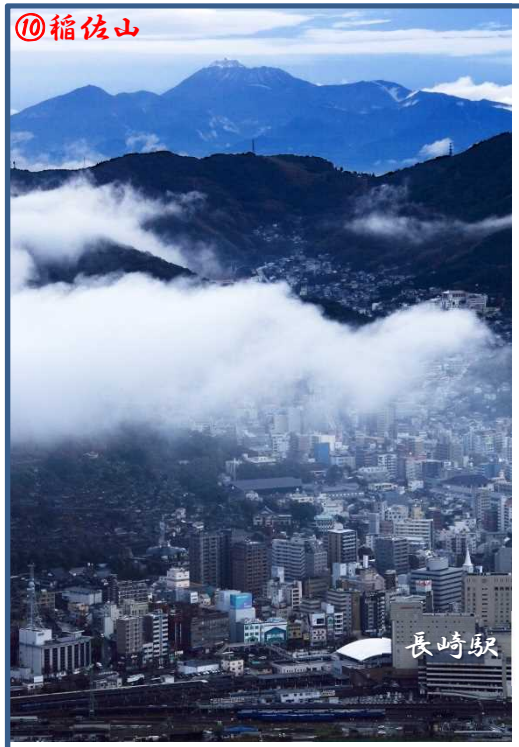
⑤御輿来海岸（熊本県）

④河内みかん山（熊本県）

雲仙岳360度③ ～陸を越えて～

●海をまたいで陸越しに眺める表情

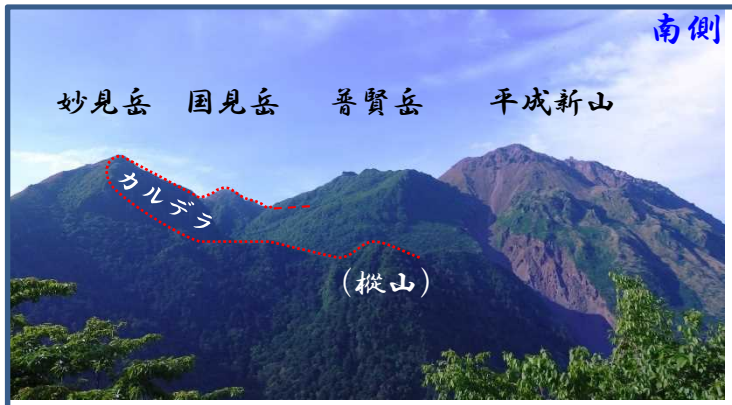
雲仙岳は360度に異なる表情を見せ、西九州の広範囲から眺められるランドマーク（目印の山）となっています。



雲仙岳の山々の顔ぶれ①

●個性あふれる30以上の山々

雲仙岳を構成する山々は、様々な形状や歴史をもち、東西南北、朝夕と異なる表情を見せてくれます。



雲仙岳の主峰群である４兄弟
（妙見カルデラの中に普賢岳・平成新山が誕生）

普賢菩薩にまつわる山
（島原市／雲仙市の最高峰）

国見町の名の由来の山

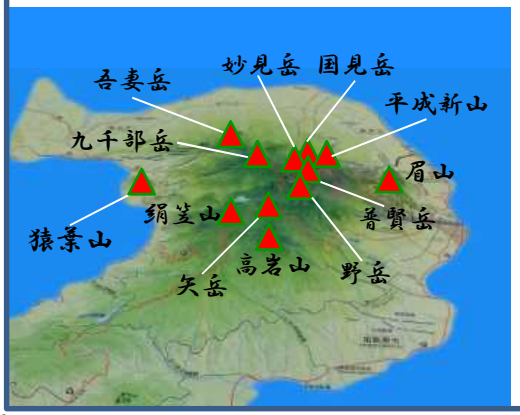
妙見菩薩にまつわる山

仁田峠背負う山（南島原市の最高峰）

巨人“みそ五郎”の住まう山

シャープな山容／緩やかな山容
（僧行基の修行の山／
吾妻町の名の由来の山）

雲仙岳の主な山々の位置



雲仙地獄を西から見守る山

雲仙地獄を東から見守る山

雲仙岳の山々の顔ぶれ②

●様々な数字で表現されてきた起伏に富む山容

雲仙岳は、三岳、五岳、三岳五峰（三峰五岳）、八景、二十四峰、三十六峰と、様々な数字で表現されてきました。

島原の町を見守る緑の屏風
（雲仙岳東端の溶岩ドーム）

有明の町を見守るお椀状の山

田代原高原（千々石断層）を
見守るトサカ状の山

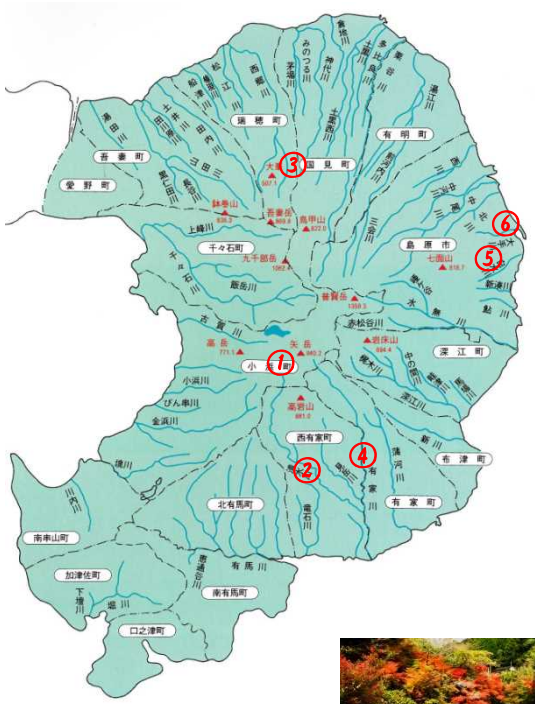
小浜温泉・千々石の町を
見守る傘状の山
（雲仙岳西端の溶岩ドーム）

眉山は、奥山（普賢岳等）に対する“前山”の発音が
前山⇒マイ山⇒眉山に転じたものとされています。
舞岳も前岳から同様に転じたものと推察されます。

雲仙岳と水①

●豊かな水～河川・滝・湧水～

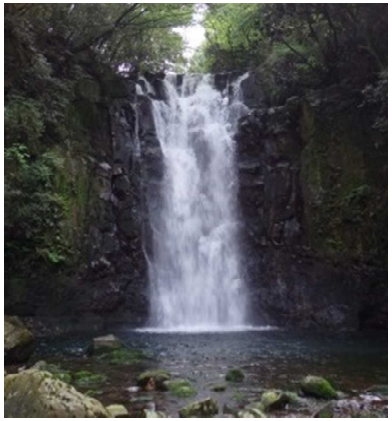
東シナ海から吹いて来る湿った西風は、雲仙岳に当たると大量の雲を発生させ、雨を降らせます。山の上部を通る仁田峠循環道がしばしば濃霧で通行止めになるのも同様の仕組みです。雲仙岳に降った多くの雨は、地下に浸透して地下水となり、一部は地表に湧き出して湧水となり、河川として流れ出します。このため、半島中央の雲仙岳からは、四方八方へ放射状に河川が流れ出しています。河川の流路上には、地質学的な要因で滝ができているところもあり、癒しスポットとなっています。
また、山麓の島原や瑞穂、小浜では、地下深くから水が豊富に湧き出し、島原では名水百選にも選ばれた湧水群を形成しています。



島原半島の河川
（一級河川８本
二級河川29本）

千畳敷（鉈帰の滝上）

①一切経の滝



②戸ノ隅滝

③岩戸湧水

④鉈帰の滝

⑤江戸時代の眉山崩壊後に湧き出した白土（しらちこ）湖（昭和２年頃）

⑥島原の湧水群

雲仙岳と水②

●多様な温泉～十湯十色～

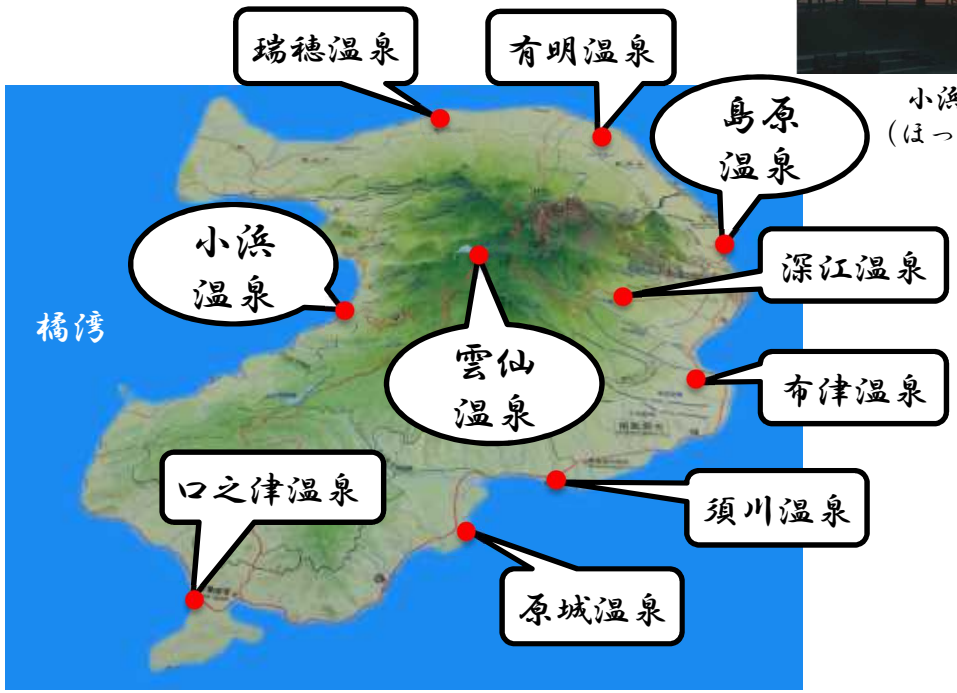
島原半島には、雲仙岳の火山活動と関係のある火山性の３温泉（小浜・雲仙・島原）をはじめ、多様な泉質の温泉があります。火山性の３温泉は、西の橘湾の地下にあるとされるマグマだまりから上昇してくる高温の火山ガスが、地下深くあるいは地表付近で地下水と出会い、混ざり合ってできたものです。小浜温泉は塩化物泉（塩湯、アルカリ性）、雲仙温泉は硫黄泉（酸性）、島原温泉は重曹泉（中性）と炭酸泉（弱酸性）です。その他の温泉もそれぞれ独自の泉質で、潮騒の聞こえる温泉や海までつながっているように感じる温泉など、多様な魅力が楽しめます。

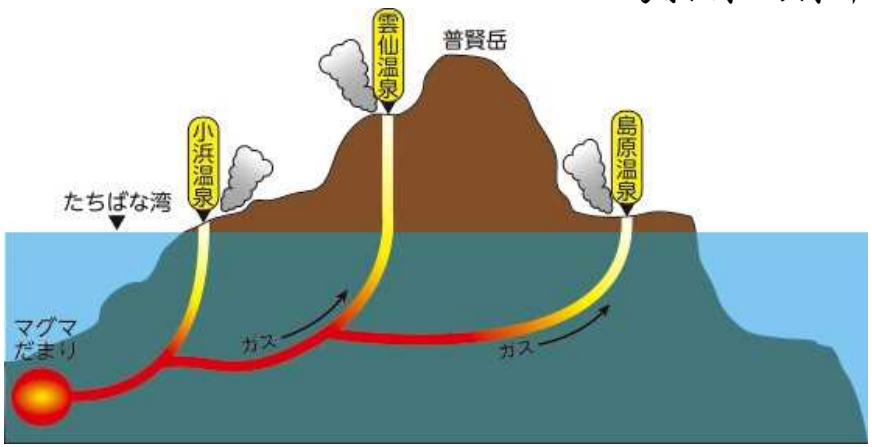
雲仙岳の旧名“温泉山（うんぜんさん）／温泉岳（うんぜんだけ）”は、遠くからも視認できる中腹の雲仙地獄の温泉湧出に由来する山名です。地獄では雲仙岳の呼吸が観察できます。

小浜温泉の足湯
（ほっとふっと105）

雲仙温泉の湧く雲仙地獄
（清七地獄）

島原温泉の飲泉所





雲仙岳と生物多様性①

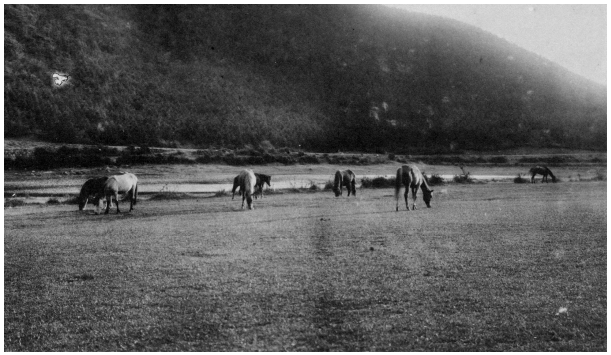
●森林と草原～ミヤマキリシマ群落との意外な関係～

雲仙岳は、春はミヤマキリシマのピンク、夏はヤマボウシの白や緑、秋は紅葉の黄色や赤、冬は霧氷の白銀と、山々の樹木が衣替えしながら四季折々の色彩を見せてくれます（「雲仙岳の四季彩」ご参照）。その樹木のイメージもあるためか、“豊かな森林”のイメージが強いようですが、実はかつて、雲仙岳の山間部の平地や斜面には、広大な草原が広がっていました。
温暖湿潤な日本では、草原は放っておけば森林へと遷移してしまいますが、阿蘇を代表とする日本各地の草原は、野焼きや放牧、草刈りといった農業の営みによって遷移が抑えられ、維持されてきました。ここ島原半島では、平安時代から牛の放牧記録があり、江戸時代には、農繁期に活躍する牛馬が夏の期間は山々へ放牧され、草をはむ、というシステムができあがっていました。牛馬が放牧され、樹木の生育が抑えられると、シバやススキの草原になりますが、葉に毒があって牛馬が好まないミヤマキリシマは、放牧草原の中で一大群落を形成します。現在、ミヤマキリシマ群落が見られる仁田峠や池の原は、かつての放牧地でした。

仁田峠・妙見岳のミヤマキリシマ群落

池の原のミヤマキリシマ群落（○内：国指定天然記念物）
現ゴルフ場のエリアには、かつて馬が放牧されていた。
写真奥の矢岳や手前の野岳の斜面にも放牧され、現在の群落を中心にミヤマキリシマの大群落が広がっていた。

矢岳とミヤマキリシマ群落



池の原（空池原）の放牧馬

明治～昭和初期には、絹笠山の周辺一帯で羊も放牧されていた。

絹笠山麓（札の原）の放牧羊

雲仙岳と生物多様性②

●牛馬と草原とミヤマキリシマ群落

古くから農作業用の牛馬の放牧が盛んだった島原半島では、江戸時代には島原藩主が体質強健な地域ブランド“島原馬”の生産に力を入れたこともあり、雲仙岳の山間部には牛馬が草をはむ草原とミヤマキリシマの群落が一面に広がっていました。島原藩主が野焼き禁止令を出すようになって以降は、草原の維持が難しくなり、草原は減少していきましたが、雲仙岳が国立公園の指定候補に内定した昭和７年の時点でも半島全体で約2635haの放牧草原が残っており、ミヤマキリシマ（＋ヤマツツジ）の群落も約880ha残っていました（飼育概数：馬8000頭・牛7000頭）。ところが、昭和９年の国立公園指定を前に多くの地域で放牧が停止され、指定直後から草原・ミヤマキリシマ群落のヤブ化が一気に進行し、昭和55年には約40ha（約5%）まで減少してしまいました。指定の当時、“観光と農業（畜産業）は両立しない”という考えがあったようですが、実は農業あっての観光だったのです。

現在、その当時の面影を残している場所が奥雲仙・田代原高原です。放牧牛と草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落のセットが見られます。JA島原雲仙が放牧する黒牛（肉用牛）による“草刈り”と奥雲仙の自然を守る会による保全活動で維持されています。仁田峠や池の原、宝原のミヤマキリシマ群落は、長崎県や雲仙を美しくする会の下草刈り等の保全活動で維持されています。

田代原（たしろばる）高原の放牧草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落
江戸時代から終戦までは馬、戦後は牛を放牧。フン虫も生息。
近年の放牧頭数減少に伴い群落も減少。現在、被圧木の除去により群落を再生中。

宝原（ほうばる）のミヤマキリシマ群落
国立公園指定当時は250ha（現在の約100倍）あり、写真奥の高岩山の背中はピンク色に染められていた。

※ミヤマキリシマの保全活動に興味関心を持っていただける観光客や市民の方々のボランティア参加を歓迎しています。

雲仙岳と食①

●土壌が産み出す大地の恵み

雲仙岳の重要な恵みとして、中腹から山麓で豊富な作物がとれることが挙げられ、島原半島内では大概の野菜が手に入りますし、お米も多く栽培されています。雲仙岳の土石流や火山灰に由来して、各地域に異なる土壌が形成されており、それらを使い分け、適した作物を配置することによって、長崎県の農業生産額の約４割を占める高い生産性を誇っています。

水田（瑞穂）

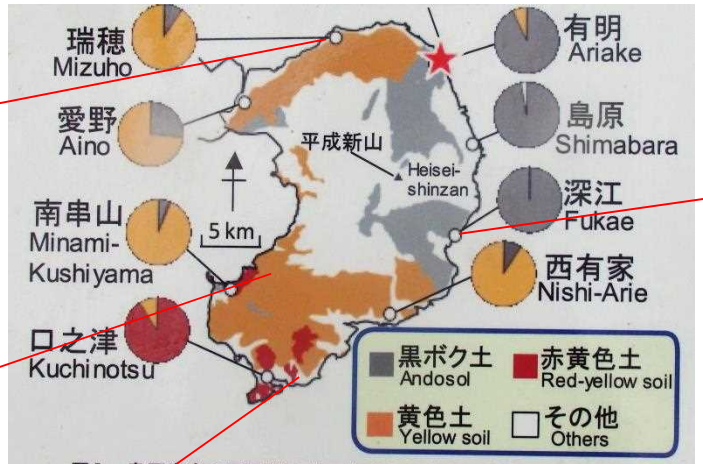
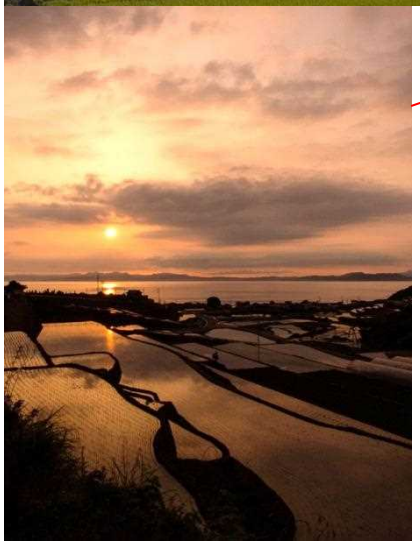


図1　島原半島の平野部の土の大まかな分布と地区ごとの割合
（長崎県，1973・1976を一部修正；月川,1986）

柔らかい黒ボク土を活かして根菜類（ニンジン）の棚畑を作っている（深江）



保水性の良い黄色土を活かし、棚田が作られている（小浜）

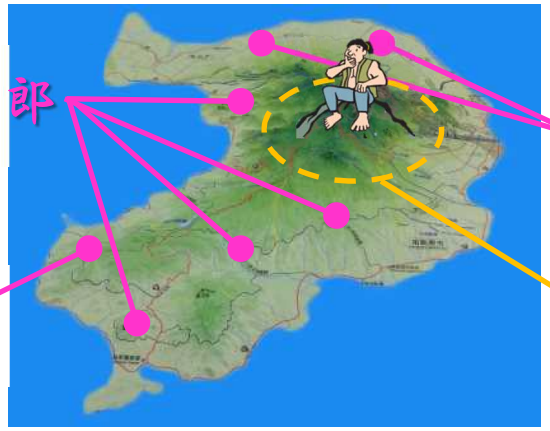
ジャガイモが好む酸性で鉄分の多い赤黄色土を活かし、生産量の多い島原半島内でも味に定評のあるジャガイモが生産されている（口之津）

傾斜地での棚田や棚畑の作成技術も大地の地形を生かす知恵として貴重

雲仙岳と食②

●大地の恵みと巨人伝説

島原半島には、雲仙岳を囲むように各地域に巨人伝説が伝わっていますが、特に有名なのが“みそ五郎”です。みそ五郎は、語源の分析から実は雲仙岳の化身であると推察され、みそ五郎が味噌をもらいながらお百姓さんや漁師さんのお手伝いをする物語は、雲仙岳が海と一緒に作り出した“山・里・海の恵み”を語り継いでいるものと言えます。島原半島では、山・里・海の食材が多く揃い、具雑煮や島原素麺、小浜ちゃんぽんなど多くの郷土料理が楽しめます。国立公園・ジオパークは“みそ五郎の恵みの公園”とも言えるでしょう。



●“みそ五郎”の名前の由来●

未曽有（みぞう） or 無双（むそう） ＋ 御霊（ごりょう）

かつてないほど or 並ぶ者がいないほどの力を持った霊魂

↓

みそごろう or むそうごろう

ジャガイモ

長崎県の全国第２位の生産量を支える島原半島のジャガイモは、半島内の飲食店でコロッケなどの形で味わえる。

島原素麺

全国第２位の生産量を誇る素麺は、雲仙岳から吹き下ろす風や湧水、有明海の塩に育まれた手延べ麺。

小浜ちゃんぽん

中国から長崎を経て小浜で独自の進化を遂げたちゃんぽんは、地元の食材を豊富に盛り込んだ栄養食。

具雑煮

島原・天草一揆の際、一揆軍が餅と海・山の具材を集めて煮込み、陣中で食べたのが起源とされる。

六兵衛

世界でも珍しいサツマイモの麺。江戸時代の飢饉の際、深江の庄屋の六兵衛さんが考案したとされる。

雲仙岳と歴史・伝承①

●雲仙岳の立地と山容～縄文時代から古代～

雲仙岳そびえる島原半島は、西は外洋の東シナ海に面し、東は九州各方面へのアクセスルートである有明海に面した立地、そして三方を海に囲まれて高さ以上に立派に見える急峻な山容を背景に、古来、様々な海外文化がいち早く到来し、花開きました。
島原半島は、国内でも最も早く（縄文晩期）稲作が大陸から導入された地域のひとつとされ、それを示す原山遺跡（農村公園）や山ノ寺遺跡等があります。仏教も同じく大陸伝来ですが、名高い僧・行基によって大宝元年（701年）、温泉山満明寺が雲仙地獄のほとりに開かれ、天皇の勅願所として、その約100年後に開山された比叡山・高野山とともに“天下の三山”と称されました。
また、中国から日本に渡来する船にとっては、一番初めに見える高い山として渡海目標とされ、「日本山」とも呼ばれました。

この満明寺の沿革を記した「温泉山縁起」には、古事記・日本書紀に登場する“天孫降臨”にまつわる興味深い伝承が記されています。天孫降臨とは、天照大神の孫（天孫）の瓊瓊杵尊が天から地へ降臨したという神話で、降臨地としては日向国（宮崎県）の高千穂峡や高千穂峰が有力視されていますが、上記の伝承では瓊瓊杵尊は島原半島にて誕生し、その後に加無之呂（神代、当時の半島の中心地）から八代を経て日向国に向かった、というのです。他方、その八代の妙見宮（八代神社）には、古代に中国東岸部の寧波（一説には朝鮮半島南西部の百済とも）から妙見神が亀蛇に乗って海を越えて渡来し、一時期滞在した、という伝承があり、天草西岸に妙見浦、島原半島には妙見岳という地名があります。天孫降臨が大陸の高度な技術をもった集団（神）の日本への渡来を表現しているとすれば、上記２つの伝承は、古代の渡来人集団が東シナ海→天草→島原半島→八代という海上ルートで渡ってきた大きな流れを、それぞれ異なる形で伝えているものと言えるでしょう。

満明寺の本尊については、高麗（高句麗）から４人の王女が飛来し、阿蘇大明神の奨めで瓊瓊杵尊が去った跡地（雲仙岳）に鎮座し、四面大菩薩となったと伝承されています。その雲仙岳は、713年編纂の肥前国風土記には“高来峰”として登場しますが、全国に点在する“高来”地名の多くは高麗からの渡来にまつわる名とされます。

昭和２年頃の満明寺

九州三大祭の八代妙見祭
（左上は亀蛇）

以上の諸伝承は、古代の雲仙岳・島原半島が、朝鮮半島や中国と並々ならぬ深い関係で結ばれていたことを物語っています。

雲仙岳と歴史・伝承②

●雲仙岳の立地と山容～古代から中世～

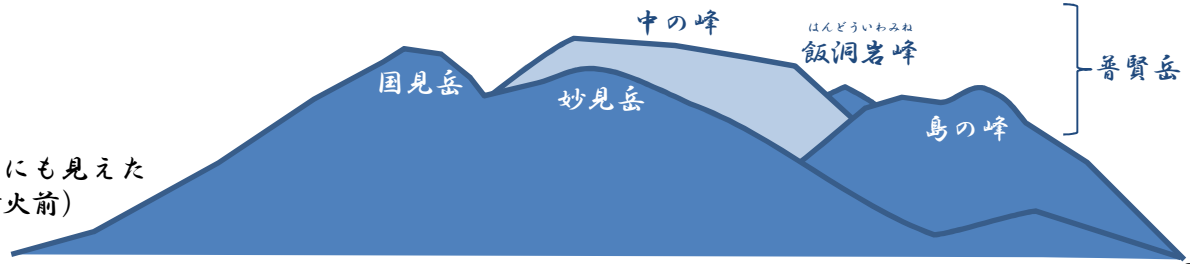
日本の山岳信仰は、仏教と神道の両方を取り込んだ“修験道”の形で展開されました。温泉山満明寺が仏教的に四面大菩薩を本尊としたのに合わせるように、神道的には温泉神社が温泉四面神を祭神としていました。高麗の４王女飛来伝承を背景に、身一つに面（顔）四つとされた温泉四面神は、一説には普賢岳（中の峰）を中心に４つの峰が取り巻いていた当時の雲仙岳主峰群の山容と関連性があるとも言います。温泉神社は満明寺が開かれた頃に創祀され、同時に山麓の４箇所(諫早・吾妻・千々石・有家)に分社が置かれました。山麓の集落にて祈願ができるよう、分社はその後増やされて、現在でも半島内に17分社が残っています。

実はこの温泉四面神、九州島そのものを表す神とされているのです。古事記において、筑紫島（九州島）には四つの面（地域）があるとされ、各地域を表す４柱（後に５柱とされた）の神々の名が記されており、その神々が温泉神社に祀られています。これは、雲仙岳・島原半島が九州島の（精神的な）中心地であった時代があったことを示唆しています。その後、中世に入って13世紀初頭、モンゴル（元）が九州に攻めてきた元寇の際、温泉四面神が戦場に現れ、元軍の一身三面の勇士（神）を迎撃したとの伝説があり、弘安４年（1281年）には九州の総鎮守とされ、九州各地の武将の崇敬を集めたと言います。九州各地から遠望でき、九州島と同様に“四面”の物語のある雲仙岳は、いつしか九州島のシンボルとなっていったと言えるでしょう。

温泉神社（本宮↑と有家分社↓）

現在、全国第２位の生産量を誇る島原半島の素麺は、中世より地域産品となっていたようで、島原藩主（有馬家）から江戸幕府への献上品に含まれていました。次項で紹介する島原・天草一揆の後に瀬戸内の小豆島から伝来したとの説もありますが、それ以前に中国南東部（福建省）から伝来したとの説が有力視されています。当地の手延べ製法の工程・道具・器具が、小豆島とは異なり、福建省の線麺と同じであるとの調査結果があり、福建省から島原半島に渡って来た技術者によって直接伝えられた可能性が指摘されています。
雲仙岳からの湧水、有明海の塩、肥沃な山麓で生産される小麦、雲仙岳から吹き下ろす乾燥した風が、名産・島原素麺を生み出しました。

島原素麺



四方に顔（面）があるようにも見えた
雲仙岳主峰群（平成噴火前）

雲仙岳と歴史・伝承③

●雲仙岳の立地と山容～中世から近世～

中世の戦国時代には、スペインやポルトガルの南蛮船が九州に来航するようになり、キリスト教をはじめとする南蛮文化が伝来しました。中国東岸を経由して来航する南蛮船がアクセスしやすい立地を活かし、島原領主の有馬氏はキリスト教をいち早く受容し、半島南端の口之津港を開港して南蛮貿易を行い、南蛮文化を積極的に取り入れました。永禄６年（1563年）、イエズス会による半島内でのキリスト教の布教が始まり、天正８年（1580年）には領主・有馬晴信が洗礼を受け（教名：ドン・プロタジオ）、キリシタン大名となりました。日野江城の下にはセミナリヨ（Seminario、中等教育機関）が創設され、ラテン語、ポルトガル語、日本語や古典の他、音楽、美術、地理学、体育等、当時の最先端の教育が行われ、有馬セミナリヨの１期生から選ばれた４名の少年が日本を代表してヨーロッパに派遣され（天正遣欧少年使節、天正10～18年）、ローマ教皇に日本での布教の成果を示しました。

他方、全国から多くの修行者が訪れていた満明寺・温泉神社の山岳信仰は、キリスト教布教上の大きな阻害要因と見なされ、洗礼直後の有馬晴信によって大小40以上の寺社が徹底的に破壊されました。現在でも、雲仙地獄一帯には“首なし地蔵”が多く見られます。雲仙地獄は当時、硫黄の鉱山と見なされ、イエズス会は領主に雲仙地獄の寄進を求め、領主も内諾していたとされますが、天正12年に攻めてきた佐賀の龍造寺氏を打ち破るのに薩摩の島津氏の援軍を得た結果、敬虔な仏教徒である島津氏の山岳信仰復興の意向に配慮せざるを得なくなり、代わりに長崎の浦上村をイエズス会に寄進したとされています。

殉教記念碑

キリスト教の布教は、九州をはじめ全国に展開されていきましたが、次第にスペイン・ポルトガルの世界征服戦略の先遣隊として見なされるようになり、天正15年には豊臣秀吉が伴天連（バテレン）（宣教師）追放令を、慶長18年（1613年）には徳川家康が伴天連追放文（禁教令）を発出し、厳しい弾圧が始まりました。長崎奉行は、信徒摘発用に踏絵を考案し、信徒に改宗を迫る拷問には雲仙地獄のお湯を用いた“地獄責め”を行い、多くの殉教者が出ました。有馬氏の日向国への転封（慶長19年）、代わりに入って来た松倉氏による厳しい年貢の取り立てや弾圧により、島原藩内の浪人・民衆の反感は高まり、やがて世に言う“島原・天草一揆”へと突き進んでいきました。

大陸からの窓口に位置する雲仙岳・島原半島は、古代より全国に知られた一大霊山でしたが、南蛮船の来航を機に衰退し、今度は南蛮文化が花開いてキリスト教布教の一大拠点となり、キリスト教弾圧が始まれば弾圧の一大拠点になるという、全国でもまれに見る激動の歴史の舞台となりました。

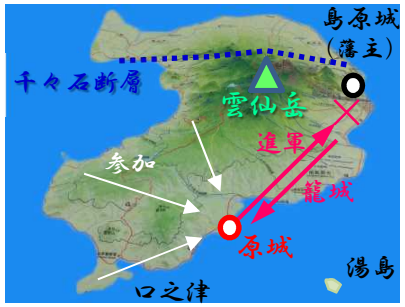
400年前のクリスマスを再現するFestivitas Natalis

雲仙岳と歴史・伝承④

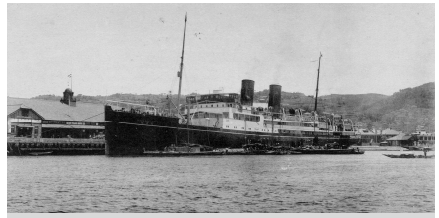
●雲仙岳の立地と山容～近世から近代～

雲仙岳と原城跡
（お城は一揆まつりの際の一夜城）

キリスト教徒の弾圧や厳しい年貢の取り立てが行われた島原半島・天草諸島では、領主への反感が次第に高まり、両地域の間に位置する湯島（談合島）において一揆の計画談合が行われ、寛永14年（1637年）10月、ついに両地域の民衆が蜂起し、「島原天草一揆」が勃発しました。
天草四郎時貞を総大将とする一揆軍は、半島内の各集落に参加を呼びかけ、千々石断層より南側、半島の2/3はほとんどの集落が参加することとなり、廃城となっていた原城（有馬氏時代の支城）を拠点に領主と戦いました。衝撃を受けた徳川幕府は約12万の幕府軍を派遣し、一揆軍は原城に籠城して善戦しましたが、翌年２月に鎮圧され、籠城した約37000人はほぼ全滅となりました。



ここに、島原半島中南部と天草諸島の一部に無人地帯が現れるという史上空前の事態が発生し、幕府は九州を中心に全国の諸藩にノルマを課して住民を集めました。全国各地から文化風習を伴って入植が行われ、多様な文化がモザイク状に分布する現在の島原半島の風土が形成されました。その後、幕府は鎖国政策をとり、貿易港を長崎出島に限定しましたが、出島から入国したシーボルト等は、一番近くの立派な山岳である雲仙岳に余暇で訪れ、その魅力を書物にて紹介し、海外で知られるようになりました（寛政年間の眉山崩壊についても記録あり）。
明治に入って開国され、工業と貿易が推進されるようになった頃、三池炭鉱が開発されましたが、干潟で大型船が入れない三池からの石炭輸出の中継港として有明海の入口の口之津港が選ばれ、明治42年（1909年）の三池港の完成まで、多くの輸出入船で賑わいました。その陰で“からゆきさん”の歴史も刻まれ、昭和初期まで続きました。



日華連絡船

明治以降、ヨーロッパを中心に雲仙岳に余暇で訪れる海外客が増え、大正12年（1923年）の日華連絡船の開通と相まって、特に上海駐在の外交関係者にとってアクセスしやすい避暑地として人気を博し、雲仙温泉街は海外文化を積極的に受け入れながら、日本初の海外向けリゾート地として発展しました。

雲仙岳と雲仙温泉街

古代より、九州、全国さらには世界の熱い視線を浴び続けてきた島原半島の歴史は、雲仙岳の立地と山容を背景としたものであり、国立公園第１号、世界ジオパーク第１号につながりました。当地で展開されてきた激動の歴史ドラマを探訪してみませんか？

雲仙岳と教育

●学校の校歌に登場する雲仙岳

学校の校歌には、生徒に郷土の自然の魅力を伝え、その雄大さや美しさを精神的な成長目標として掲げる、という側面があります。吉岡庭二郎氏（元島原市長）の調査をきっかけに、島原半島内の全小中学校の校歌を調査した結果、以下の通りでした。

・全52小学校のうち46校、全20中学校のうち19校の校歌に雲仙岳を意味する文言が登場。
・３市の小学校の内訳：　島原市…９校中９校、雲仙市…20校中19校、南島原市…23校中18校
・地域によって、眉山や吾妻岳、高岩山、富津岳が登場。
・全52小学校のうち51校、全20中学校のうち19校の校歌に有明海や橘湾を意味する文言が登場。

平成27年
３月時点

雲仙市の比率の高さはもちろんですが、島原市は100％、南島原市は78％と予想以上に高く、学校教育において雲仙岳、そして海と山が織り成す水陸の景観美が重要視されてきた実態が明らかとなりました。

島原市の例

●第一小学校
前に筑紫の海清らかに
後に温泉（みゆ）の山高く立ち・・・
●第三小学校
・・・よばばこたえん眉山の尊き姿・・・
しらぬ火燃ゆる有明の海を・・・
●高野小学校
雲仙のたかねは晴れて清らかに・・・
有明の汐のかもめのあいよりて・・・

雲仙市の例

●多比良小学校
白雲あそぶ雲仙岳　碧波よする有明潟・・・
●大塚小学校
吾妻岳なだらにはせてみはるかす・・・
有明の朝日を浴びて遠浅の・・・
●雲仙小学校
あした普賢の雲にみて・・・
夕べ麓の海のぞみ・・・
●南串第一小学校
・・・雲仙の裾ひろがりて
千々石の海は青く澄む・・・

南島原市の例

●大野木場小学校
・・・有明の海　潮は満ちて・・・
・・・理想は高く　普賢の嶺・・・
●龍石小学校
朝日輝く雲仙岳の・・・
白雲うつる有明海の・・・
真澄みに光る高岩山の・・・
●野田小学校
仰ぐ雲仙　山紫に・・・
雲か山かの天草灘に・・・

さらに調査を進めたところ、長崎県内の長崎市、諫早市、佐賀県の白石町、福岡県の柳川市、大牟田市、熊本県の荒尾市、長洲町、玉名市、熊本市、八代市、宇土市、天草市等の小中学校の校歌にも登場し、対岸各地域の“故郷の風景”となっていることが判明しました。

雲仙岳と文化財

●文化財としての雲仙岳

島原半島内には数多くの文化財が存在していますが、雲仙岳を対象とした国指定文化財に限定すれば、特別名勝として「温泉岳」天然記念物として「地獄地帯シロドウダン群落」「野岳イヌツゲ群落」「普賢岳紅葉樹林」「原生沼沼野植物群落」「池の原ミヤマキリシマ群落」「平成新山」が指定されています。このうち、特別名勝（風致景観がすぐれ我が国にとって芸術上または観賞上の価値が特に高いもの）に指定されている山岳は、実は全国でも富士山と雲仙岳（温泉岳）のみです。

富士山と雲仙岳の共通点

・周辺の４以上の県から立派な山体全体を鑑賞できる。
・霊峰として古くから崇拝され、山麓地域を越えて広い地域の方々の精神的支柱となってきた。
・有史以降も活発な噴火活動を繰り返してきている。（これら全てを満たす火山は国内でもまれ）

江戸時代の世界的な浮世絵師・葛飾北斎は、富士山に魅了され、当時の風物や人々の営みを交えて富士山を様々な方角から描いた作品集「冨嶽三十六景」や「富嶽百景」を発表しました。この「富嶽百景」になぞらえ、「島原半島の魅力～雲仙岳百景～フォトコンテスト」（平成26年度、国立公園「雲仙」指定80周年及び島原半島世界ジオパーク認定５周年記念事業実行委員会）を実施したところ、長崎県内はもちろん、佐賀県、福岡県、熊本県、鹿児島県からも眺望写真の応募があり、“西九州のランドマーク”であることが確認できました。（※本冊子内でも作品を一部掲載）

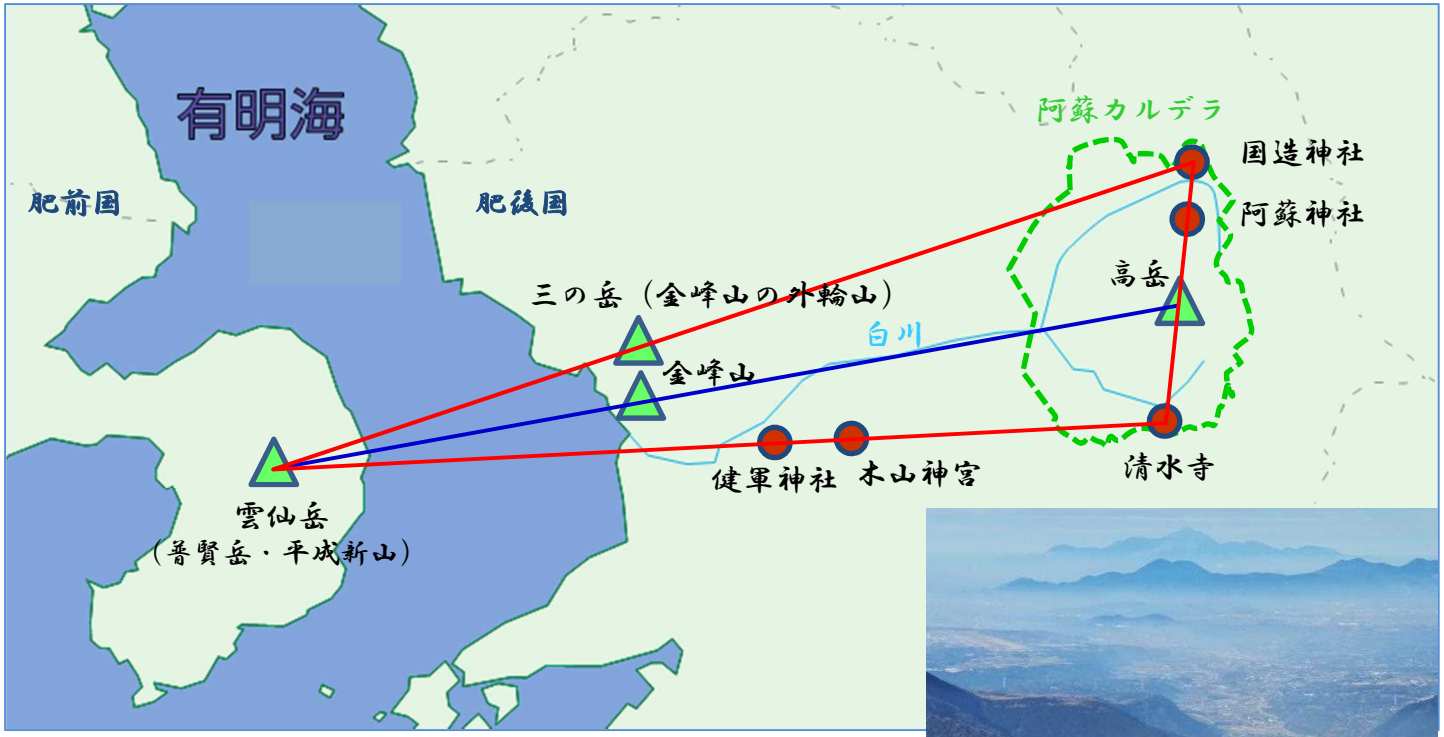
雲仙岳のこのような県を越えた奥深い魅力にいち早く気付き、80年前に情報発信されたのが、長崎県選出の衆議院議員：橋本喜造氏でした。氏は、国立公園指定を機に執筆した「国立公園　雲仙大観」の中で、江戸時代以降の雲仙岳を題材にした漢詩や歌、絵画等を幅広く収録・紹介した上で、雲仙岳が遠景・近景の両面で優れ、東西南北に異なる表情を見せ、佐賀県（佐賀城）、福岡県（高良山）、熊本県（阿蘇、八代の日奈久温泉、天草諸島など）から眺望できることを紹介しました。国立公園の指定関係者が編纂した「日本の国立公園」（昭和９年発行）は、雲仙岳を「西九州に於ける水陸遊覧系統のセンター」であると記していますが、その趣旨を深く理解し、美辞麗句を尽くして雲仙岳の「富士山に負けない魅力」を力説された氏の文章には、現代にも通用する幅広い視野と先見性があったと言えるでしょう。

国立公園指定を機に建設され、氏が経営を任された雲仙観光ホテル（国の登録有形文化財）

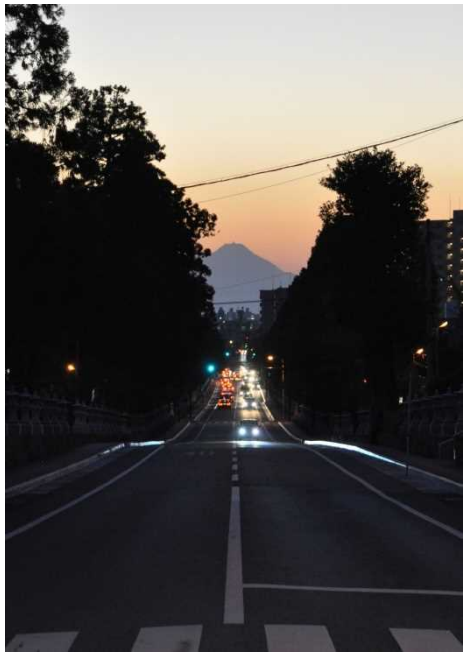
雲仙岳と阿蘇山①

●雲仙岳と阿蘇山の古代からのつながり

現代、雲仙岳と阿蘇山のつながりが話題とされることはほとんどありませんが、実は古代には並々ならぬ深い関係があったことが神社仏閣の配置から読み取れます。雲仙岳・金峰山・阿蘇山（高岳）は同じ火山帯に属し、東西にほぼ一直線上に並んでいますが、そのラインを軸に雲仙岳と阿蘇山を大三角形で結ぶような配置で、古代創建の神社仏閣が並んでいます。これは、有明海の東西にまたがる古代の肥（火）の国において、西（肥前）にそびえる雲仙岳と東（肥後）にそびえる阿蘇山が２大火山として重要視され、両山の位置関係をベースに国づくりが進められていったことを示唆しています。　（ご参考 ⇒ http://tizudesiru.exblog.jp/i51/）



阿蘇草千里から望む金峰山・雲仙岳



熊本市最古の健軍神社の参道
約1.2kmの参道（八丁馬場）の先に、雲仙岳が正面に現れる。

自然のライン（地学的に形成されたジオライン）
人為的なライン（神社仏閣の配置で形成されたライン）

雲仙岳と阿蘇山②

●雲仙岳・阿蘇山と有明海

時代をもっとさかのぼれば、雲仙岳と阿蘇山のさらなるつながりが見えてきます。雲仙岳と阿蘇山にはさまれた有明海には、現在日本一の面積を誇る広大な干潟が広がっていますが、これは大量の土砂を運び込む多くの流入河川、波静かな奥の深い入江などの条件が整っているためです。有明海沿岸には筑後川や白川をはじめとする多くの一級河川が流れ込みますが、実は、約30万～９万年前に阿蘇山が巨大噴火した際に九州北部全体をカバーした噴出物を運び込んでいるのです。その大量の土砂がなぜ外洋に流れ出さないかと言えば、雲仙岳・島原半島が存在するためです。もしも約50万年前に雲仙岳が活動を開始せず、小さな火山島のままで島原半島になっていなかったなら、外洋の波が直接有明海に打ち寄せて、大量の土砂が外洋に流れ出したことでしょう。
有明海の広大な干潟は、阿蘇山と雲仙岳の“阿・雲の呼吸”とも言うべきコラボによって成立しているのです。

荒尾干潟

宇土の干潟

もしも雲仙岳が存在しなかったなら・・・

吉野ヶ里からの雲仙岳

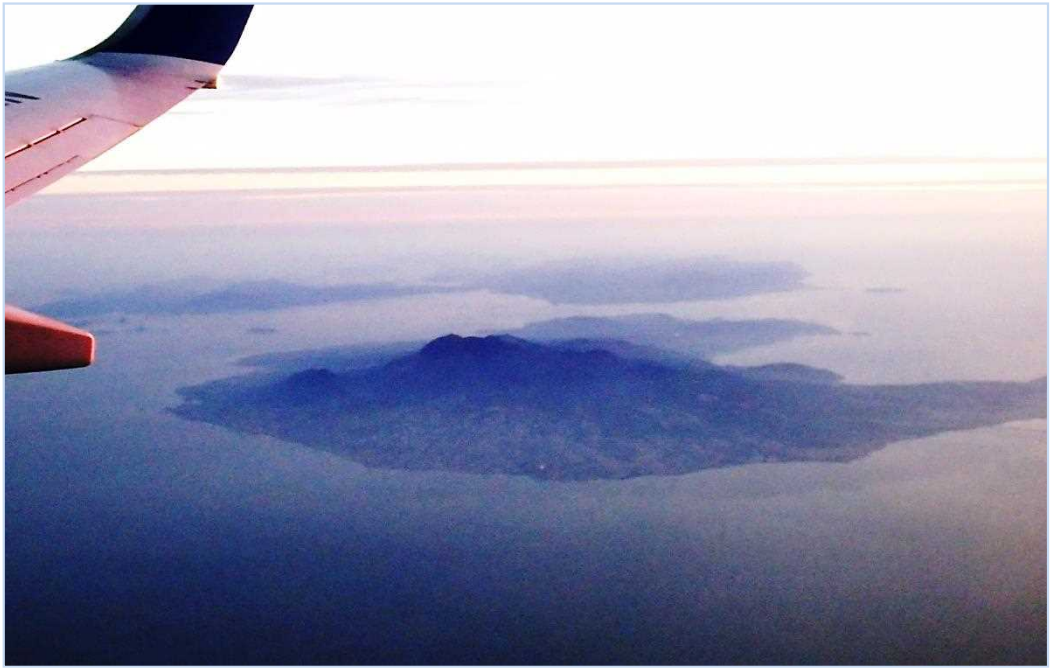
コラム：吉野ヶ里遺跡

佐賀県内陸部にある吉野ヶ里は、古代には有明海沿岸にあり、その後の干拓で内陸部となりました。実は、吉野ヶ里遺跡の建物配置の中心線は、雲仙岳を向いています。古代の人は、有明海の干潟越しに雲仙岳を眺めながら、町づくりを進めていったと考えられています。

雲仙岳と天草諸島

●雲仙天草国立公園のパートナー

雲仙岳そびえる島原半島と大小約120の島々から成る天草諸島は、手を結び合うように有明海の入口を構成し、東シナ海と有明海をつなぐ同様の立地から、有史以来、多くの歴史を共有して来ました。縄文時代に国内でいち早く始まった稲作、みそ五郎伝説、妙見信仰、後に温泉山満明寺を雲仙岳中腹に開基することとなる僧行基が天草から雲仙岳を眺望して自らの修行の場と決めた逸話、中世のキリスト教の伝来・布教、キリスト教弾圧、談合島（湯島）における一揆の計画談合、島原・天草一揆、その後の無人地帯への諸藩からの入植、江戸時代末期以降の“からゆきさん”の歴史、大正時代に伝わって独自の進化を遂げた“ちゃんぽん”など、永く歴史を共に歩んで来たと言えます。
昭和９年、雲仙地域が国立公園に指定される際には、天草地域を含めるよう推薦する専門家の声も上がり、戦後の昭和31年、ようやく天草地域の追加指定が実現し、「雲仙天草国立公園」となりました。有明海・東シナ海と雲仙岳・天草諸島が織り成す“水陸の大展望”は、両地域の歴史・文化、地形を活かした棚田・棚畑の景観を織り込んで、訪れた方の心を捉えることでしょう。



手を結び合うような、手前の雲仙岳・島原半島と奥の天草諸島

雲仙岳を楽しむ

●雲仙岳を楽しむ国立公園とジオパーク

本誌でご紹介してきたように、“雲仙岳の火山活動の賜物”という意味で国立公園とジオパークは一体です。
国立公園の内外を含めた山～里(町)～海のパノラマの中でお好みのテーマ（食／温泉／360度景観／歴史等）に沿って島原半島内の興味スポット（ジオサイト）を探索いただければ、必ずやお客様ならではの様々な半島周遊ルートを組むことができることでしょう。
半島を周遊される中で、雲仙岳のもつ“秘めたるパワー”をお楽しみいただければ幸いです。

0m～1483mの
水陸の大展望

参考　80年前の地元新聞記事①

●雲仙国立公園の指定内定まで

（ご参考　⇒　島原の郷土新聞
http://www.city.shimabara.lg.jp/section/shakyo/kyodoshinbun/index.html）

島原町をリーダーとする旧南高来郡（島原半島）の全町村、長崎市、長崎県を挙げての指定運動が展開され、島原半島全体を国立公園に指定しようとしていた様子や、一時期は落選の危機にあった状況が、地元新聞の記事見出しから垣間見られます。

発行年月日			新聞名	見出し
昭和5年（1930年）	6月	23日	大島原新聞	雲仙国立公園指定申請
	7月	6日	島原新聞	国立公園の指定は　大阿蘇か雲仙か　長崎市では期成同盟会を組織し　市民大会を開き猛運動
				雲仙国立公園促進の南高期成同盟会　町村長会議で組織成る　いよいよ猛運動開始　陳情委員三名上京
		8日	〃	熊本でも猛運動　阿蘇国立公園実現に
		13日	〃	雲仙国立公園設置に（島原）町民大会を開く　十四日夜　大手広場で　宣言決議をして気勢を揚ぐる
		16日	〃	雲仙滞在外人　安達内相に陳情
		18日	〃	水の仙郷　諏訪公園一帯　雲仙公園地域に編入？　地元の熱烈な希望
				上海外人も（国立公園指定）推薦　内務大臣に電報
	8月	16日	〃	秩父ケ浦公園で開く国際水泳大会　島原秩父ケ浦駅間に三十分毎に臨時列車運転
				雲仙滞泊の外人多数参加せん
		30日	〃	阿蘇を中心に別府、耶馬、日田を含む一大国立公園計画
	11月	8日	〃	雲仙公園の強味は海の展望　藤村義朗男の推奨
昭和6年（1931年）	3月	23日	大島原新聞	一地域の小規模から　西日本大国立公園へ
				九州横断国際観光路大幹線の設定　島原鉄道庶務課長　松本龍之郎氏談
	10月	20日	島原新聞	島原半島全部　国立公園に　指定方を極力陳情す
昭和7年（1932年）	4月	12日	島原新聞	国立公園に入選か否か運命の鍵を握る　調査委員一行の視察　雲仙はどうなる！
	8月	14日	〃	九州の国立公園は阿蘇と霧島が決定
		17日	〃	国立公園指定雲仙望み薄
		29日	大島原新聞	雲仙国立公園問題に悲観は大禁物　最後の五分間までもと　池田県議談
	10月	2日	島原新聞	雲仙を中心とする島原半島の国立公園
		4日	〃	郡民の熱望遂に達せられん　雲仙岳国立公園特別委員会で入選す
		9日	〃	吾が雲仙岳愈々（いよいよ）国立公園に決定（８日に内定決定）
		10日	〃	国立公園運動の歴史　待望実に二十一年　遂に実現す
		12日	〃	雲仙国立公園大衆的に祝賀　気分をあふる長崎と地元で祝賀会　夜は提灯行列
		17日	大島原新聞	雲仙国立公園の祝賀会を盛大に挙行　二十一、二の両日長崎市で各種の催し
				雲仙では二十三日・南高各町村が協賛
		22日	島原新聞	島原郷土史料展珍資料多数出品　雲仙国立公園決定記念の催し
		23日	〃	雲仙国立を機に長崎を遊覧都市へ

参考　80年前の地元新聞記事②

●雲仙国立公園の正式指定まで

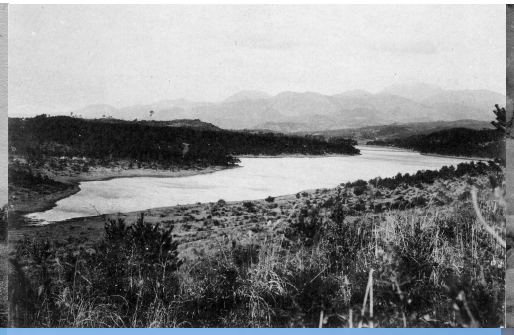
国立公園の指定内定以降は、どこまでを公園区域に入れるか、大きく揺れた様子が垣間見られます。地元では雲仙岳の中腹以上と風光明媚な海岸部（原城趾や富津等）を区域に含めようとするも、飛地のないシンプルな計画としたい政府の意向で海岸部は外され、専門家から評価の高かった対岸の天草も編入が保留され、雲仙岳中腹以上のみの区域指定でスタートした様子が分かります。

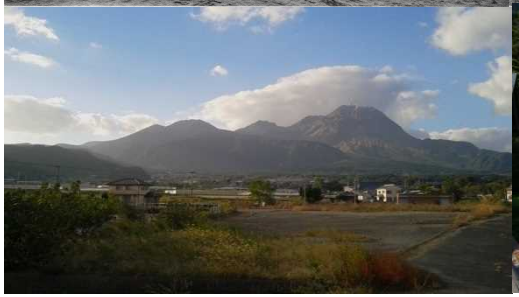
発行年月日			新聞名	見出し
昭和8年（1933年）	1月	15日	島原新聞	国立公園と牧野関係　県当局と打合せ
		17日	〃	牧野の殆ど全部　国立公園地区に編入されん　防畜設備費は国、県の助成に待つ方針
				西郷村岩戸神社境内を国立公園地区に編入請願
		25日	〃	福岡久留米から雲仙遊覧に九鉄がコースに着眼　一新航路を計画す
		26日	大島原新聞	烏兎神社を国立公園地区に　土黒村から当局へ申請
		27日	〃	原城趾も雲仙公園に編入　県が力瘤を入れる
	2月	2日	島原新聞	雲仙国立公園　杭のうち初め　山岳部の実査に入る
		3日	〃	飛地の編入は今で決定しない
		4日	〃	雲仙国立公園の区域　相当ひろく　（飛地のため）原城趾は包括されまい　谷口県技師は語る
		5日	〃	天草の雲仙公園編入可能性は充分
		7日	〃	西郷岩戸、土黒烏兎両神社一帯　国立公園区域に編入
		14日	〃	小濱と千々石入口に南串山割石原も編入
				多比良の仙境・・・魚洗川　国立公園地域に編入さる
		15日	大島原新聞	大観賞すべし天草の風光　雲仙国立公園天草編入問題で実地視察中の田村博士　天草を激賞
		19日	〃	雲仙はお座敷　天草は庭園　天草側編入を熱望
		25日	島原新聞	飛地を保留し杭打了る　雲仙国立公園関係町村は二十二
	3月	4日	大島原新聞	富津、木津半島国立公園に編入を陳情
	4月	9日	島原新聞	国立公園地域編入祝賀会を開く　土黒烏兎神社境内
		20日	大島原新聞	雲仙国立公園区域に天草編入は必要　視察の上地元の希望に副（そ）ひたい　脇水博士は語る
	5月	10日	島原新聞	雲仙国立公園区域内に多良岳編入を希望
	11月	23日	大島原新聞	偶感　国立公園雲仙の指定と共に使命益々大　島鉄の過去と将来　仙水楼主人
	12月	2日	〃	本郡二十六個町村中の二十二個町村を国立公園地域に決定
昭和9年（1934年）	2月	25日	島原毎日新聞	五十年後の島原半島は雲仙国立公園を中心に一大遊園地とならう　谷口県技師が専門的に考察
	3月	17日	〃	雲仙公園十六日正式に国立に指定さる　日本最初の国立公園として
		23日	〃	輝く雲仙　挙県多年の願望　国立公園報告祭　温泉神社社頭にて盛大に行はる
	9月	19日	〃	ゴルフ場から仁田へ新道路　県営ホテル（観光ホテル）も成案
	12月	15日	〃	雲仙国立公園の世界的宣伝

参考　雲仙岳の80年前と現在

●風景今昔

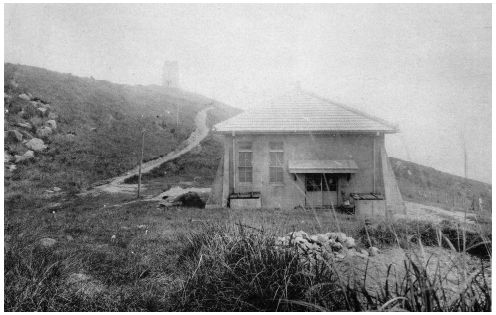
昭和９年に雲仙国立公園が指定される前夜の昭和２年頃に撮影された写真を、現在の同様のアングルの写真と対比させて一部紹介します。当時の写真は雲仙お山の情報館所蔵です。





深江方面からの雲仙岳　　仁田峠（移動用の籠）　　諏訪の池からの雲仙岳　　大叫喚地獄

雲仙ゴルフ場



絹笠山の測候所

（昭和７年）

国立公園指定祝賀パーティー

参考　島原半島周遊の情報拠点

●がまだすドームとビジターセンター

島原半島周遊のための情報拠点としては、ジオパークの中心拠点で半島全体の情報が得られる雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）と国立公園のビジターセンター３館があります。

雲仙岳災害記念館
ジオパークの全体的な情報をご紹介。

雲仙お山の情報館
雲仙岳の登山情報や
半島北西部のジオサイトをご紹介。

平成新山ネイチャーセンター
平成新山等の自然情報や
半島北東部のジオサイトをご紹介。

雲仙諏訪の池ビジターセンター
諏訪の池周辺の自然情報や
半島南部のジオサイトをご紹介。

【島原半島周遊を楽しむための情報】
・まるまる島原半島
http://www.shimakanren.com/
・島原半島ジオパークＨＰ
http://www.unzen-geopark.jp/

ジオパーク入門用に、子供向けのジオパークマンガ“わくわく！島原半島探検隊”をご活用ください。上記施設やウェブページで入手可能です。（紙芝居版やプレゼン版もあります。）
http://kyushu.env.go.jp/pre_2014/0430a.html

掲載イラスト・写真の提供元①

P.3　イラスト：吉田　初三郎氏 画
（C）アソシエ地図の資料館
P.4　イラスト：島原半島ジオパーク協議会
P.5　イラスト：島原半島ジオパーク協議会
P.6　表　　：島原半島ジオパーク協議会
P.7　表　　：島原半島ジオパーク協議会
写真　　：（4枚）大河　憲二氏
P.8　イラスト：島原半島ジオパーク協議会
P.9　写真　　：（左上）草野　俊彦氏＊
（右上）竹馬　朋宏氏＊
（右下）巽　信吾氏＊
P.10　写真　　：（左上）小川　數馬氏＊
（左下）草野　俊彦氏＊
（右上）巽　信吾氏＊
（右下）酒井　寛氏＊
P.11　地図　　：国土交通省雲仙復興事務所
写真　　：（⑤）草野　俊彦氏＊
（⑥）酒井　寛氏＊
（⑦）竹馬　朋宏氏＊

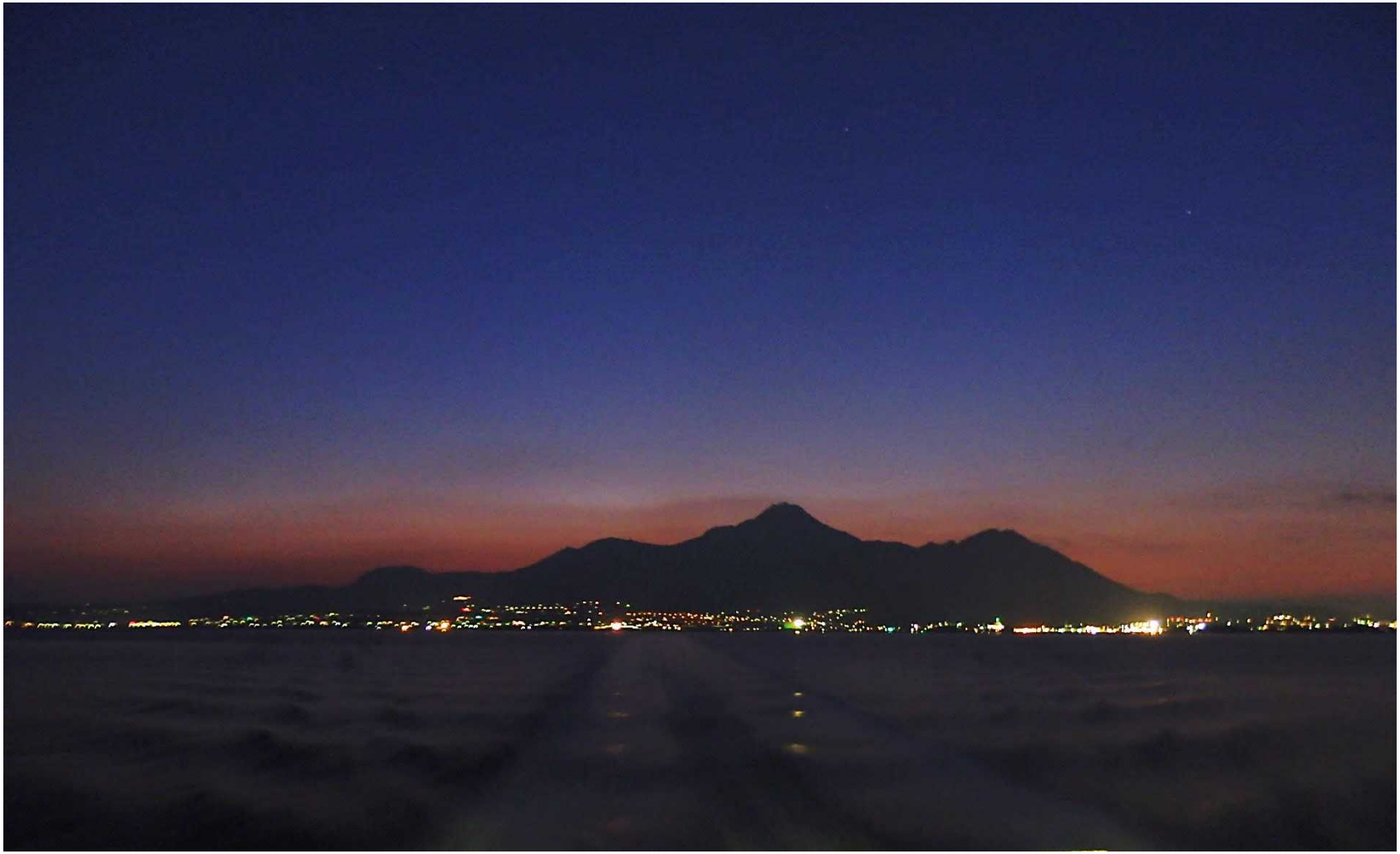
P.12　写真　　：（①）渕上　久男氏＊
（②）藤松　政晴氏＊
（③）川副　秀氏＊
（④）鶴田　須美子氏＊
（⑤）野田　純一氏＊
（⑥）カール　ジェンソン氏＊
（⑦）一ノ瀬　昭豊氏＊
P.13　写真　　：（②）小川　麻子氏＊
（③）荒木　喜八郎氏＊
（④）藤松　政晴氏＊
（⑥）鶴田　須美子氏＊
（⑦）日當　國親氏＊
（⑨）片山　研吾氏＊
（⑩）小山　保則氏＊
P.14　地図　　：国土交通省雲仙復興事務所
P.15　写真　　：（中央）一ノ瀬　昭豊氏＊
（下）渕上　久男氏＊
P.16　イラスト：長崎県島原振興局山地災害復興課
（“雲仙・普賢岳噴火災害と治山事業”）
写真　　：（左下）渕上　久男氏＊
（④）渕上　久男氏＊
（⑤）雲仙お山の情報館

掲載イラスト・写真の提供元②

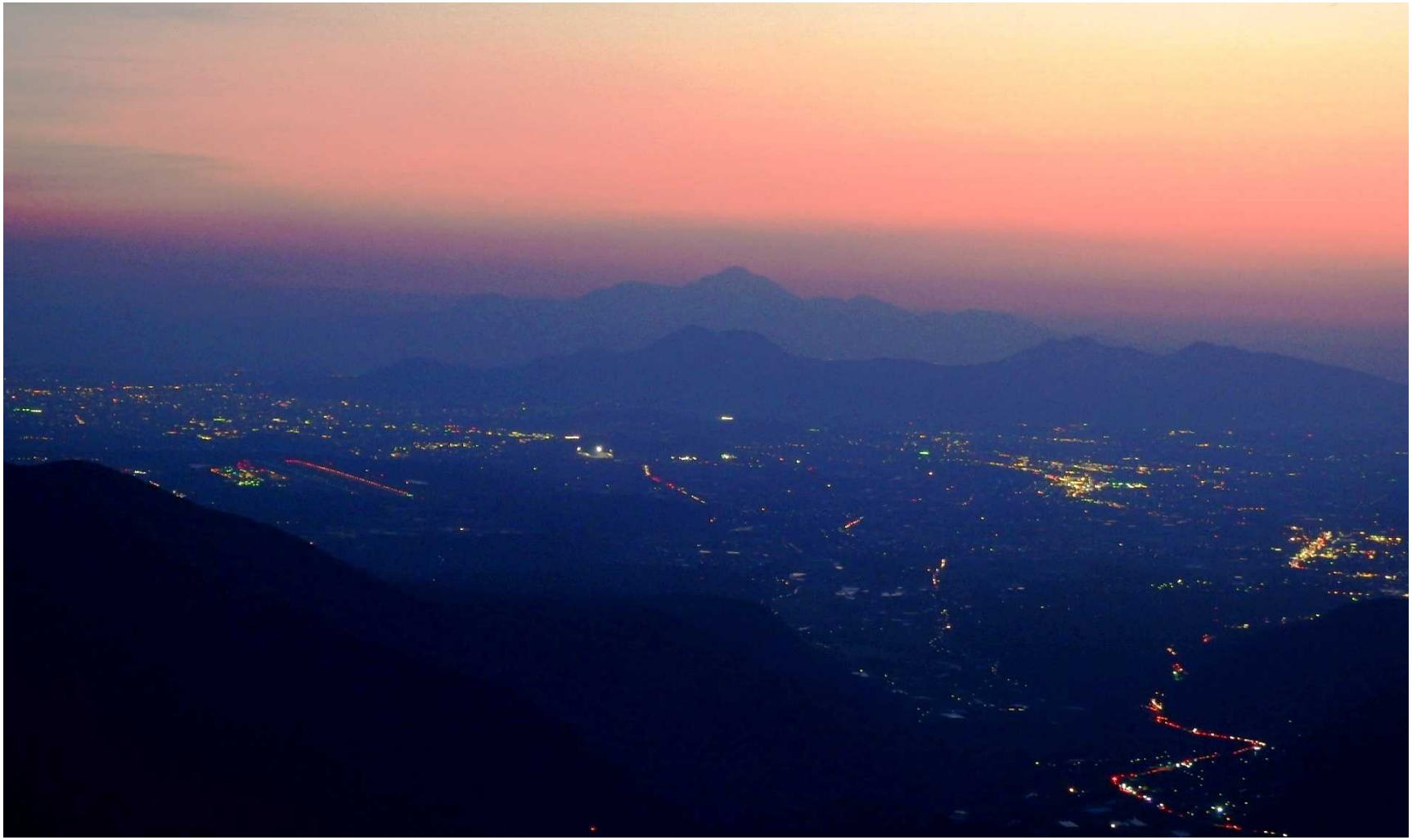
P.17 地図　：国土交通省雲仙復興事務所
　　写真　：（左上）小浜温泉観光協会
P.18 写真　：（左下）雲仙お山の情報館
　　（右下）雲仙お山の情報館
P.19 写真　：（左上）柴田　鹿吉氏＊
　　（左下）木田　智氏＊
P.20 イラスト：島原半島ジオパーク協議会
　　写真　：（左下）菅　記博氏＊
P.21 地図　：国土交通省雲仙復興事務所
P.22 写真　：（中央）雲仙お山の情報館
P.23 写真　：（右上）大河　憲二氏＊
P.25 地図　：国土交通省雲仙復興事務所
　　写真　：（右上）巽　信吾氏＊
　　（右中）雲仙お山の情報館

P.28 写真　：（左）鶴田　須美子氏＊
P.29 写真　：（左上）竹下　将明氏＊
　　（左下）野田　純一氏＊
　　（右上）福田　敬氏
P.31 イラスト：島原半島ジオパーク協議会
P.32 表　：“島原の郷土新聞”より作成
P.33 表　：“島原の郷土新聞”より作成
P.34 写真　：（上段）雲仙お山の情報館
　　（下段）雲仙お山の情報館
P.37 イラスト：吉田　初三郎氏 画
　　（C）アソシエ地図の資料館

※上記以外の写真は、環境省撮影。
※＊の写真は、“島原半島の魅力～雲仙岳百景～フォトコンテスト”の応募作品です。



フェリー（島原～熊本航路）からの雲仙岳夜景



阿蘇草千里からの雲仙岳夜景

環境省九州地方環境事務所
平成28年３月発行